大官大寺南方の調査（飛鳥藤原第203次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、大官大寺と山田道にはさまれた地域の実態解明を目的として、継続的な調査をおこなっています。昨年度は２月から３月にかけて、大官大寺南限から南へ約25mの地点で試掘調査をおこないました。調査面積は120㎡です。また、試掘調査地南方では約10,000㎡を対象に地中レーダー探査をおこないました。

調査の結果、７世紀後半以降とみられる整地土層をはさんで、上層では南北溝２条、下層では７世紀前半の東西溝１条とそれに沿う柱穴列等を確認しました。

上層の南北溝２条は、藤原京東四坊坊間路の東西両側溝の可能性がありますが、溝の大きさや埋土の堆積状況がそれぞれ異なっており、さらなる検討が必要です。

一方、下層の東西溝は調査区内では南肩を確認したのみですが、幅2.2m以上、深さ約0.5mで、断面は逆台形です。この溝からは土師器、須恵器等がまとまって出土しており、概ね７世紀前半に位置づけられます。また、ウリ種実等の植物遺存体、燃えさし等が出土しています。これらは東西溝の南肩付近から集中的に出土することから、南方から投棄された生活廃棄物と考えられます。

今回、大官大寺南方に藤原京の条坊が施工されていたかどうかの確証は得られませんでした。しかし、７世紀後半以降の複数回の整地土層を確認することができたことにくわえ、７世紀前半の遺構の存在があきらかになったことは、当地域の土地利用の歴史を考える上で大きな成果といえます。

今後もさらに南の地域で試掘調査、地中レーダー探査を実施し、７世紀前半の遺跡の広がりや、それ以降の整地の年代や条坊施工の有無を解明していく予定です。　　（都城発掘調査部　片山 健太郎）

下層東西溝と柱穴列（北東から）